

文部科学大臣賞

もしもの夜にともる “希望のあかり”

大切な人に「ありがとう」の気持ちを込めて

北海道 札幌市立北都中学校 三学年

安達 侑歩

「茶碗洗いやつといて。」「洗濯物たたんでおいて。」「勉強も忘れないでね。」――母の声が聞こえるたびに、「忙しいからあとで。」「気が向いたらやるよ。」と、つい口答えをしてしまう。本当は、母がどれほど家族のために毎日大変な家事をしているか、気付いていたはずなのに見て見ぬふりをしていた。

ある日の夜、電気を消そうとした時、「入院……いつからにしようかな。」と、母が父に話す声が聞こえてきた。「入院？」私はスイッチに触れた手が止まった。胸が「キュッ」となった。何で？お母さんに何かあった？病気？それとも……。直接聞きたいけれど、怖くて聞けず、その日はよく眠れなかった。

数日後、母と二人で出かけた帰り道、「ちよつと話があるんだけどね。」と言われ、私は身構えた。

「お母さん、卵巣腫瘍っていう病気になっちゃって、手術と入院が必要なの。」頭が真っ白になった。思わず「死なないよね。」と聞いた私に母は「死なないよ。でも、卵巣を取るから、もう赤ちゃんは産めないかもしれない。」と言った。妹がもう一人欲しい。そんな話を前にしたことがあったが、今は赤ちゃんのことより母が生きていてくれる方が百倍大事だと思った。手術への不安な気持ちもあったが、「大丈夫。私にできることは任せて。手術、頑張つてね。」と笑顔で答えた。でも本当は怖くてたまらなかった。笑顔でいることがあんなに難しいなんて初めて知った。それでも私は、母自身が一番不安に思っていると思う、涙は必死でこらえた。

母は生命保険に加入していた。私の家は決して裕福ではない。手術や入院にかかる費用は大きな負担となるはずだった。しかし、医療特約のついた保険のおかげで、手術費も入院費も保険から支払われた。

「自分のことで家計に負担をかけずに済んでよかった。」

そう話す母の顔には安心したような表情が浮かんでいた。その姿を見て、生命保険は家計だけでなく、心にも余裕を与えてくれるのだと感じた。

母の入院中、家事は私と父と妹で分担した。洗濯、料理、掃除、四歳の妹のお世話……。段々、自分の時間はなくなっていく。時々妹は「ママに会いたい。」と泣きながら言ってきた。私もその時は、一緒に泣きそうになった。今まであんなに口うるさいと思っていた母が、こんなに恋しくなるなんて……。

第63回中学生作文コンクール

母の退院の日。私は「おかえり。」と笑顔で迎えるつもりだった。でも、母の顔を見た瞬間、抑えていた感情があふれ、「大好き。いつもありがとう。」と泣いて抱きついてしまった。母は始め驚いていたが、目に涙をいっぴいたため「ママも大好きだよ。」と言い、優しく抱きしめてくれた。

私はこの経験を通して、二つの大きなことに気付いた。一つ目は、母の存在の大きさ。普段の何気ない毎日が、母の力で支えられていたということ。二つ目は、生命保険がそつと灯してくれた“希望のあかり”。母がいない間、真つ暗闇にならずに済んだのは、その明かりが私たち家族の足元を照らしてくれていたからだと思う。

母の命が助かったのは、早期発見と、きちんと備えていたからだ。『保険について考えるのは、まだ早い。』と思っていた私も、今では将来、家族のために必ず保険に入ろうと決めている。また、私はこの出来事をきっかけに「感謝の気持ちを伝えること」の大切さも学んだ。「ありがとう」「大好きだよ」——それは、保険と同じくらい人の心を支える言葉なのかもしれない。だから私は、保険に入るだけでなく、周りの人に優しい言葉や行動を届けられる人になりたい。そして大切な人を守りたい。その思いこそが、保険を選ぶ時の私の原点になると思う。